福 島 市 総 合 教 育 会 議 記 録 (第3回)

令和7年2月18日（火）（庁議室）

16時15分～17時30分

出席者（4名）

市長	木 幡 浩	教育長職務代理者	渡 辺 慎太郎
教育長	佐 藤 秀美	教育委員	立 花 由里子

事務局出席者【総務部】

総務部次長	本 田 博 進	総務課係長等
総務課長	秋 葉 英 紀	

事務局出席者【教育委員会】

教育部長	三 浦 裕 治	生涯学習課長	遠 藤 彰
教育部次長兼教育総務課長	長 南 敏 広	中央学習センター館長	加 藤 享 司
学校教育課長	穂 積 浩	こども政策課長	佐 藤 敏 和
教育施設管理課長	八 島 亨 圭	教育総務課・学校教育課係長等	

1 開 会

2 議 題

- (1) 松陵義務教育学校の開校について
- (2) 中央地区の小学校再編について
- (3) 市立小・中学校の不登校の現状について
- (4) 市立小・中学校のいじめの現状について
- (5) 市長部局と教育委員会で連携している事業について
- (6) いじめ重大事態等への対応の現状について（非公開）

3 閉 会

16時15分 開 会

市長あいさつ

（市長）

○今日は何か寒さがぶり返している感じがありますが、寒さの中お集まりいただきましてありがとうございます。この総合教育会議も今年度3回目ということになるわけですが、このような定例化はいじめ問題に端を発して、首長部局、それから教育委員会がよく連携して取り組もうということで、このような取り組みをしているわけです。そうした中でいじめ問題に関して言うと、後程報告があらうかと思いますが、数自体は横ばいですが、中身としていじめの認知に対する姿勢がより敏感にというか、丁寧になってきていて、そういう点では非常に良い傾向なのかと思います。その点ではいじめの認知件数が上がってくるわけですが、やはり問題化したのを見ると、いじめの初期の段階で十分把握できてなかったというのがありますので、その点では我々が今後いじめ問題に取り組む上で、やっぱりこういった取り組みの成果があらわれてきているのではないかというふうに思っています。

それから、やはり継続的な取り組みが必要な不登校の対策ですが、これも様々な手を打って参りました。今回の動向を見ると、ようやく改善の糸口が見えてきたかなというふうに思っております。後程また報告していただきますが、これからはいじめ、不登校に対して多面的なアプローチを行って、そしてできる限り自分のペースの中で学業を就業していける。それでもって、社会に向けて育て、自分の目標を実現できるような、そんな教育を今後とも進めていきたいというふうに思っております。

それから今回、そういった中で抜本的な教育の動きに関するものとしては、義務教育学校というのが開校しますし、あと何よりも、中央地区小学校の再編ということに関しても、まだ途中段階ではありますけども、精力的に検討を進めていただいていますので、その状況を今日は報告をさせていただきたいというふうに思っています。

それとこれまで皆さんにも評価いただいていたスーパーティーチャーによる教育ですけど、そういった質的な関わりを、今後はその学校だけではなくて、家庭教育でも取り組めれば、相互連携して、非常に子どもたちの育成の改善が図れるのではないかとということでこれから新たな取り組みを進めることにしています。

それから、学校施設に関しても温暖化の中で、冷房という非常に大きな投資をす

る必要があって、財政的にはリフレッシュの必要性が高まったさなかにまた空調設備を入れるというのは非常にきついですけど、災害対策もありますので、やらざるをえないと思っております。そのように本当近年、学校に対する投資というのを集中的に進めてきて、学校とは非常にその点で充実した環境になりつつある方向になるわけです。そうすると、その学校施設を平日の昼間の授業中だけ使えるものというのは非常にもったいないわけであります。

一方で、市内の保護者の皆さんからは、子どもたちの居場所・遊び側がないという非常に大きな声をいただいているんですね。その点ではこども計画というのを、こども未来部中心に作っていますが、そこで子どもの居場所・遊び場として、こどもベース、子どもの基地とそういった概念を作って、学校を最大限そういった子どもたちのものに活用していきたいと思っております。ただ、その場合にこれまでのように学校が管理するというにすると、教員の働き方改革に逆行してしまいますので、我々としてはそれを学校の管理とは切り離しをして、地域で管理をする。或いはそこに学童なんかもこれから積極的に入れていくとすれば、学童の皆さんに管理していただくとか、より広い視点で学校の活用管理を考えていって、教員の働き方改革とも両立をさせていきたいなというふうに思っています。

そして1月から教員の働き方改革と、子どもたちの授業或いは課外活動の充実ということで、企業の皆さんに応援をさせていただくスクール・サポート企業登録制度を始めたんですけど、これ自体は立花さんはお聞きになったと思いますが、私はいろんな業界団体の新年会の挨拶でそういったことをご紹介・宣伝しています。教育委員会だけじゃなくて、産業部局からもですね、積極的に今働きかけて非常に興味を持っていただいています。すでに62社から登録いただいています。そういったものをうまく活用できるようにしていきたいなと思っています。その点、また担当の方から、いろいろ説明あるかと思いますが、いずれにしても、これからこの少子化が進む中で子どもたちはやっぱり宝です。この子どもたちがいかに、育っていくかということで福島の町の質というかそれが変わってきますし、またそういうことをすることで、今、人口が流出している若い世代がまた福島に定着していただけることにもなると思うので、引き続きこの教育を最重要課題の1つとして取り組んでいきたいと思っておりますので、どうか皆さんからお知恵なりご指導をよろしくお願ひしたいというふうに思います。

私からは以上です。さっそく議題に入りたいと思っております。よろしくお願ひします。

議題（1）松陵義務教育学校の開校について

（木幡市長）

○議題1について説明をお願いします。

（学校教育課長）

○松陵義務教育学校の開校についてでございます。現在の進捗状況等をお伝えしたいと思います。まず、資料1の1ページの3番になりますが、今年度も開校準備委員会を開催して参りました。2月20日の5回目が最後となりますが、今年度5回、それから前年度の令和5年度にも5回開催しまして、この準備委員会におきましては、校歌ですとか校章、それから制服、そういったものを検討し決定をしてきたところでございます。

3番の（2）教育課程の編成委員会ということで、実際に4月開校になりましたら、どのような教育を施していくのかということで、教育課程の編成を進めているところでございます。その編成委員会を松川地区の4校の教員24名と、教育委員会の指導主事が入りまして2回委員会を開き、令和7年度の義務教育学校の教科の経営案ですとか年間指導計画のほうを策定しているところでございます。

それから（3）となりますが、補助と交通手段ということで、前期の1年生から6年生までの子どもたちの登下校の安全ということで、スクールバスの説明をしているところです。もうすでに統合しました水原地区の1路線に加えまして、金谷川地区、下川崎地区のそれぞれ3路線ずつのスクールバスのコースを考えておりまして、全部で7路線のスクールバス運行ということで、保護者・地区の皆様にも説明をしたところでございます。

資料の2ページ目でございます。（4）校歌指導の会についてということで、校歌の方を完成いたしまして、校歌の作詞と作曲を担当していただいた先生方に、指導の会ということで、学校に来ていただきまして子どもたちに直接指導していただきました。作曲の大友良英さんによる指導の中では、子どもたちが本当に元気に校歌を歌う姿が見られました。和合亮一さんによる指導の中では、この校歌、歌詞の意味がよくわかって、この校歌をとともこれからも大切にしていきたいなんて子どもたちの意見も聞かれたところでございます。

実際の引っ越しのスケジュールというものでございます（5）ですが、現在新しく完成した校舎には松川小学校の子どもたちが入っておりますが、校舎の改築工事が終わりましたら、1度松川小の子どもたちは1年生から4年生までが松川小の方にもう一度移ります。そして新しい中学校の校舎の方へは松陵中学校が引っ越しを

してくるというような形で、4月の開校に向けて準備を進めているところです。開校式については、4月7日月曜日の9時半からということになっております。

先ほど4月からの教育課程の編成を進めているというお話をいたしました但3ページ目をご覧くださいと思います。校訓につきましては、歳寒松柏という一般的には逆境にあっても思想を変えない人を表す言葉で、人生において厳しい状況に直面したときも自分自身をしっかりと持ち、おれない、諦めない芯の強い心を持ち続け、困難を乗り越えることができる。そういった子どもたちになって欲しいという思いを込めて作られたものです。それを受けて教育目標、主体性・協働性・創造性という3つの目標が決められまして、そこから9課程の編成ということになります。

一番下になりますが、義務教育学校ならではの学びということで、現在編成作業を進めているところですが、まずは各教科等において、ブロックごとに目指す児童像をしっかりと定めて、9年間の見通しを持って計画的・系統的な指導で、確かな学力を育むということで計画を立てております。

ブロックごとと申しまして9学年を4年・3年・2年の区切りで考えまして、それぞれのブロックでどんな子どもたちを目指すのかというところをしっかりと押さえた上で、各教科でどんな指導していくのかというところを明確に今計画を立てているところです。

あと一番大きなところは、小中一貫教科ということで、まだ仮称であります但「まつかわ学」。これは松川地区をフィールドとした問題解決的な探究学習ということで、まさに松川ならではの教育になるのではないかと考えております但、松川町の資源を生かして地域に根差した実践的・体験的な学びを進める教科として、中身を計画立てているところでございます。

あとは1年生から9年生までおりますので、異学年交流。これにより、豊かな人間性や社会性を育てていく。それから、教育活動の中に人的・物的資源を活用して、地域について学ぶようなそういう体験活動を多く取り入れて、松川町のよさに気づかせ、ふるさとのよさを感じさせる、松川を愛する心を育てるということを考えまして計画を立てているところでございます。

最後になりますが、松川地区の人材、地域人材と連携、そして地域とともにある学校ということでコミュニティスクールを立ち上げまして、地域とともにある学校づくり、地域とともにある松陵義務教育学校ということで運営していきたいというふうに考えているところでございます。

（市長）

○皆さんの方から何かあれば。

義務教育学校としては4・3・2というブロック化というのは割とスタンダードなんですか。

（学校教育課長）

○6年・3年と普通にやるところもありますし、4・3・2は比較的多いと思います。やはり一番のいいところは3の部分で5年生から7年生までのところで、学校で言えば前期と後期をつなぐ、中1ギャップ等を防ぐというところで、特に大事にしていきたい3年間のところを、重視してやっていくということで、取り組んでいる義務教育学校は比較的多いと思います。

（木幡市長）

○ありがとうございました。引き続きですね、4月からしっかりと開校できて子どもたちの教育が充実するように取り組んでください。

議題（2）中央地区の小学校再編について

（木幡市長）

○続いて議題2に移ります。中央地区の小学校の再編について説明をお願いします。

（学校教育課長）

○中央地区の小学校の再編についてでございます。

まず、これまでも経過のお話をして参りましたが1ページ目の3番、これまでの検討委員会での取り組み内容というところをご覧ください。ちょうど1年前、令和6年の2月に第1回の検討会を開催いたしまして、2ページの方にも移りますが、そこから検討会を重ねて参りました。2月5日の第7回の構想検討会をもって今年度は終了ということになります。2ページの表をちょっとご覧いただきたいのですが、最初は各学校等の状況を確認していただくというようなことを行い、そのあと7月の第4回に先進的な取り組みをしている事例ということで、鎌倉市の教育長様、白石市の不登校特例校、学びの多様化学校の校長先生などをお招きして、それぞれの実践事例を紹介していただいた後、10月の第5回、11月の第6回、そして今回7回ということで、委員の皆様と協議をしていただきました。

大きな柱としましては、先導的な学びとはどういうものなのか。一人一人に寄り

添った多様な支援のあり方というのは、どんなことが考えられるのか。それから、中央地区の小学校の再編のあり方、学区の見直しということで、この大きな4つの柱を中心にですね、それぞれ委員の皆様協議いただきましてご意見を伺ったところでございます。

2ページ、下の方にありますが4番の今後の取り組みの予定につきましては、年度が変わりますが、5月に協議いただいた内容、それからご意見等を入れた基本方針案を検討し、7月の第9回の検討会でこれが最終回となりますが、基本方針の策定ということになります。基本方針を教育長に委員長から提出ということになります。そのあと、教育委員会としてこの基本方針について地域等に説明をし、基本方針と地域の方々から伺ったご意見等を踏まえた上で、12月までに再編計画を完成させるということにしているところでございます。

3ページには、それ以降の予定も記載しております。令和8年度には、再編計画の説明会を行いまして、校舎等も含めて準備を進め、令和13年の4月には開校というような現在のスケジュールでございます。では、4ページ目でございますが、この検討会で出された意見、簡単にちょっとまとめてあります。中央地区だからこそできる魅力ある教育の実現というものを目指して、そしてこれまで培ってきた一小・四小・清明小の文化の継承、そういうものも踏まえながら、先ほど申し上げました4つの柱で委員の皆様協議をしていただきました。図の左側、第5回と書いてありますが、先導的な学びについて協議をした会でございます。その中で、委員の皆様からは、児童自らが課題の解決に挑戦するそんな学習。それから子どもを主語にした授業の質的改善が必要なのではないかと。それから中央地区という地域性を生かして、研究機関や企業と密接に連携しながら学べる学校になって欲しい。子どもと教師をつなぐ地域サポーターがいる学校であって欲しい。そして、空き教室を市民に開放し、いつでも学べる環境を作って欲しいなどという意見が出されました。第6回では右側の下の方になりますが、自分に合った個別最適な学びができる学校があればいい。それから、福島市の環境を生かした様々な人間と関わりながら学ぶことができる学校を目指して欲しいという意見が出されました。第7回、最後の会になりますが、その中には先導的な学びを実現する学校と、一人一人に寄り添った多様な学びを実現する学校。そんな2つの学校が設置されればいいのではないかなんていう、ご意見もいただいたところでございます。これらのいただいたご意見、それからまたここに拾い上げてない、上げきれていないこともありますので、そこにつきまして検討委員会の委員長さんと、教育委員会として、一応方針の案を作って次回の委員会に提案したいというふうに考えておりま

す。

（木幡市長）

○それでは中央地区の再編についていかがでしょう。

（渡辺委員）

○今のご説明の最後で案を作って次回の委員会で提案したいとおっしゃったんですけど、ここでいう次回の委員会というのは検討委員会のことですかね。

（学校教育課長）

○次回の第8回、年度が変わって5月の検討委員会の方で案として提示して検討いただくということになります。あくまでもその方針案は、検討委員会の方で作成することとなっておりますので、委員長様のご意見等いただきながら、一応私たちがたたき台ということで、方針案を作成し第8回の検討会で検討いただくということになります。

（立花委員）

○今の基本方針のところというのは、この検討委員会の皆様が基本方針を策定した後、私たちは内容を知るといようになりますかね。今途中でこんなものというのはこの絵がほとんどです、ということでしょうか。

（学校教育課長）

○今のところは4ページのこの図になります。

（立花委員）

○そうしますと、もう1つ質問ですけど、例えば今おっしゃったように私はこの3つの学校が統合して1つになるのかなというふうに先入観で思っていたんですけど、先導的な学びを実現する学校と多様な学びを実現する学校という2つの学校になる可能性もまだあるということですか。

（学校教育課長）

○基本方針ではあくまでも、中央地区の学校としてこんな学校を目指していきたいという、そういう理念のようなもの話し合いとはなってしまうまして、実際に

その学校が1つになるとか、2つになるとかそういうことについては、私たちが後日作成する再編計画の方で具体的に示されるものでございます。ただそのような、先導的な学びの学校と、あとは、多様な学びを実現する学校っていう、そういう2つの学校もいいのではないかというようなご意見を委員の皆様から伺ったというところでございます。

（木幡市長）

○よろしいですか。あと今、私聞いて思ったのは、教育委員会は検討委員会の事務局ですよ。だからそのお話の前に総合会議とか、教育委員会の方に出すというのはちょっとプロセスとして違うだろうと思うんです。教育委員会が委員会としてやる場合には、当然教育委員会にお諮りをしなきゃいけないわけですけど、今回は外部機関にお願いをしてそのサポートとしてやっているのその点ではそういう流れになるのはしょうがないのかなという感じがします。

（教育長）

○冒頭、市長から学校にもいろいろ投資をして、いろんな活用の仕方を考えていくべきだろうというお話ありましたが、そうした意見が、実際やっぱり委員の皆さんからも出ています。この4ページの左側にある子どもと地域住民等がシェアする学び舎っていうのはまさにそういう意味で、空き教室だったり、いろんなものを子どもたちもですが、やっぱり大人たちいろんな世代が活用できるようにしていったらいいんじゃないかというご意見であったり。それから先ほど立花委員がおっしゃった、先導的な学びの学校と一人一人に寄り添った多様な学びを実現する学校というところも、それを1校で全部カバーしきれぬのかと、そのような意見もあって、こういった形にまとめているのが現在の状況であります。

（木幡市長）

○地域の皆さんにもいろいろサポートしていただきたいと思うんですけど、ただ、我々として踏まえなきゃいけないのは、やっぱり学校は子どもを中心にやるべきだろうと。今日も実は私ふくこぶしという老人クラブ連合会の会議に出ましたけども、皆さん本当にとにかく高齢者専用の或いは優先の施設をつくれとおっしゃったんですけど、私はむしろ今、高齢者が一番多いんだから、ただでさえ高齢者の皆さんが使ってるから、それは前と違いますよという話をさせてもらったんです。高齢者の皆さんはもう本当に福島にいる人はわからないかもしれませんが、

他の地域からするとこんなに学習センターで立派なのがあるところはないんですよ。だからそちらで十分使っていただけるので、子どもを中心に子どもと一緒にとか。サポートするという点では、地域の人たちも関わっていただいていると思うんですけどそこはある程度、しっかりと役割分担しながら進めていくべきなのかな、なんて思っています。よろしいでしょうか。

議題（3）市立小・中学校の不登校の現状について

（市長）

○続いて議題の3に移ります。これはもう定例の状況、経過報告をしていただきます。不登校の現状です。

（学校教育課長）

○過去3年間における同月の不登校児童生徒数を比較した資料でございます。今年度の中学校における不登校生徒数は減少しております。さらに、私たちが一番大きく見ているところは、新規の児童生徒数ですね。これにつきまして減っているということでございます。出現率についても減少が認められます。これについては、学校におけるその新規不登校者を出さないという、そういう取り組みが効果を上げているものと、中学校で言いますとやはりサポートルームの支援が大きいのではないかと。それによって学校に足が向かない生徒ですとか、自分の学級には入れないという生徒が、サポートルームになら登校できているということで、それが機能している成果ではないかというふうに考えているところです。

2ページ目をご覧ください。今お話したことですが、実は別室に生徒支援教員を配置している、これは市の方で配置しているところで8校ありますが、生徒支援教員を配置している学校と、別室はあるのですが生徒支援教員を配置していない学校で比べた場合ですね、サポートルームやその別室に登校する生徒が学校の方に復帰してきているという割合がやっぱり生徒支援教員がいる別室の方が高いということなんです。生徒支援教員の配置がない学校については、別室はあるものの、その復帰率というのは低いということで、やはり生徒支援教員の配置が、不登校生徒の増加の抑制に繋がって効果がある、ということがうかがえるというふうに私たちは考えているところです。

生徒支援教員がいれば1日そこに先生がいて、しっかり学習も教えてもらえますし相談にも乗ってもらえます。ただ、支援教員がいなくてですね、やはり空き時間の先生が入り代わり立ち代わりきまして、なかなか入れないなという時間もある

のかもしれませんが。そうではなくて、そこに人がしっかりいるというところで、支援教員の配置の効果が出ているんだなというふうに私たちは認識しているところでございます。今年度も2ページの下の方からになります。不登校支援パッケージですとか、3ページの方に移りますが、そういった別室に登校してきている子どもたちへの（5）オンライン学習教材のデキタスを活用して、子どもたち1人1台タブレット持っていますので、学習保障を目的として、そういったオンライン教材も導入しながら、子どもたちをしっかりと別室で受け入れて学習をさせていくというようなことで取り組んで参りました。3ページの下の方3番になります。今後の取り組みといたしまして、やはり生徒支援教員は効果があるということで、この拡充をする方向で進めていきたいということと、今申し上げましたが、学習教材のデキタスの活用。これを有効に活用するということで、生徒自身が自ら学習のつまずきを解消できるような、そういうツールとして、有効活用していきたいというふうに考えているところでございます。

（木幡市長）

○では、ご質問・ご意見ありましたらどうぞ。

（渡辺委員）

○生徒支援教員の効果というか、奏功していることは十分わかりました。その上でなんですけど、県専任教員配置校の復帰率が特に高いようにこのデータ上は見えるんですね。それはたまたまこの学校の特殊性であるのか、その県専任教員のノウハウなり、或いはその何らかの予算とかも含めてそういう違いがあるのか。そこはどうか分析してらっしゃいますか。

（学校教育課長）

県専任ということで県の方からスペシャルサポートルームという、加配ですね、教員の加配をいただいている学校が、実は5校ございます。5校のうち支援教員も一緒に入っている学校が4校あって、ここに示している1校だけが県の加配の教員のみ配置されてるという学校でございまして、この復帰率については、この学校のその状況なんだと思います。やはり、今、委員がおっしゃったように、子どもたちをどういうふうに受け入れて、どんなふうに相談したり学習を進めていったりしたらいいのかというのは、県の配置の方もそうなんです。支援員としてもやはり情報交換をして、効果があるものを横の展開で広げていくということは大事な

ものでして、そういう機会は年に数回もって、取り組みをしてみて効果的だったということは他の支援員、別室の方にも広げるっていうようなことをしているところでございます。

（立花委員）

○よくわかっていないんですけど、県の専任の配置校は5校あるということは、他の4校はこの上の生徒支援教員配置校のところのどこかという理解でよろしいですか。

（学校教育課長）

○おっしゃる通りです。

（立花委員）

○そうするとそこは2人いらっしゃるというと、県と市の方で2人いらっしゃるっていうことになりますか。

（学校教育課長）

○その通りでございます。県の方から配置されているという学校は、やはり不登校生徒が多いところに配置はされているところでございます。そこに、市の雇用となりますが、生徒支援教員を配置することによって、さらに効果を高めるということに取り組んでいるところでございます。

（市長）

○よろしいですか。内情でいうと随分とこの生徒支援教員の有効性について、財政の予算査定の中でも議論ありましたが、なかなか教育委員会からはエビデンスが出てなくて、判断に苦労した面があるんですけど。今のこの話だったら、やっぱりこれはダブルと書かなきゃだめだね。生徒支援教員だけの効果じゃないわけですから。だからそういう点では一番手厚いのは、生徒支援教員と県教委のダブル配置のところ。それはそういうダブル配置だということをちゃんとジャンルとして作った上で見せないとミスリーディングなっちゃいますよね。その上で県支援だけ、或いは市単独の生徒支援だけというので見てみないと、ちょっとこれは、分析の仕方として不正確じゃないですかね。ちなみに、ダブルになっているところはどこですか。

（事務局において資料を確認するが、その場で確認できず）

（木幡市長）

- どちらにしても今、県が配置になっているのはどちらかという今まで生徒支援教員を県が配置してくれないから市でどんどんやってたわけですよ。単独でやっていたけども、やっぱり単独で1人だけではもう間に合わないというところを、加配の際に教育委員会とすれば一番困難なところを2人体制でやったわけですよ。だから、その点で優先的に生徒支援員を入れて、また厳しいところに県を入れて、もう一つちょっとあったときにこの数を見てもわかる通り、少数の少ないところに、入れているから、周りに母数が8とか或いはスペシャルサポートルームとか13のところにお1人いるから非常に相対的に手厚いですよね。手厚いからある意味では、復帰率というかそういったものも高くなるとも見ることができるし、何でもここに配置なのかなというのはちょっとよくわからないんだけど。
- 小中一貫ですとか地域のことだから、ここは確か、他の学校とも絡むんだよね。だから本当はそうなってくると、もう一つ分析をしなければいけないのは、そこに専属して配置されてるわけじゃないけど、スペシャルサポートルームを使える学校が未配置校の10校の内どれだけあるかだよ。ちなみにそれは10校のうち、全部が使えているのか。使えてないところもあるんでしょ。だから、そういう分け方をして、ちゃんとその濃淡をちゃんと整理しないと、分析として不十分だよ。そこは、終わったらちょっと整理をして教えてください。
- それでもって、やっぱり生徒支援教員とか基本的に同じ役割なんでしょ。基本的に同じですから、我々福島市としては加配が少ないから、自分たちで何の支援もなくやり始めましたけどその有効性を、県の教育委員会にお話をしてその上でちょっと積極的に加配を取って配置してくれるように求めるべきだと思うんですよ。

（指導係長）

- 今ご指摘いただいた、県の専任教員と生徒支援教員がダブルで配置をさせていただいている学校は、A校・B校・G校・H校の4つでございます。

（木幡市長）

- あとちなみに未配置校で、広域対応で利用できるっていうのはどこか。拠点校のサービスを利用できるというのはどこになるんですか。

（指導係長）

○基本的にすべての学校で利用できるようになっております。

（市長）

○まず、そういう教員のサポート力の濃淡というか、その体制もちゃんとわかるようにしておかないとちょっと正確な分析にならないんじゃないかと思いますので。

（渡辺委員）

○今のお話に加えて時系列的に、配置する前と配置した後でどう変わるかがやっぱり1つの指標になってくると思うので、市長のおっしゃる通りもう少しマトリックスを詳細にしたほうがいいかなと思います。

（木幡市長）

○そこはやっぱり生徒支援教員とかを配置して、或いはこれを取っていく上では重要なエビデンスになりますので、その分析はしっかりやってください。よろしいでしょうか。

議題（4）市立小・中学校のいじめの現状について

（市長）

○続いて議題の4に入ります。いじめの現状について事務方、説明をお願いします。

（教育施設管理課長）

まず1ページ目でございますが、いじめの認知件数の推移でございます。1番が小学校のいじめ認知件数ということです。2学期の認知件数が令和5年度より28件ほど多くなっているということです。いじめの定義に照らして適切にいじめを認知するように依頼してきたもので、学校としてもそのようにしっかりやっているというふうなことが考えられます。2番の中学校のいじめですが、2学期の認知件数が令和5年度よりも14件、これも多くなっております。いじめの定義に照らして適切にいじめを認知できるようになってきているというふうに考えているところでございます。本当に少なければいいということではなくて、多いと逆にしっかり見て認知をしているんだというところで、そういう学校が増えてきているということで私たちはとらえているところでございます。2ページです。今年度、強化して

きた取り組みとしましては、教育委員会の中にいじめ問題に係る専門の部署とい
いますか担当者を配置していただきました。これが学校と密に連絡を取り合いな
がら、心配な子どもがいたらしっかり相談に乗って、学校と連携を図りながらい
じめ防止に努めてきたということで、とても効果的でした。

あと研修で言いますと校長対象・教頭対象のいじめ研修を今年度も行いました。
さらに、児童が一人一台端末を持っておりますので、毎日の登校した段階で心の
状態を児童自身が先生に伝えるということで、そういうコンテンツを導入して子
どもの悩みを表出できるようにして参りました。

今後の課題といたしましては、学校として危機意識を持って対応できるようにな
って来ましたし、自校のいじめ対策、組織を招集して、迅速に対応する学校が増
えて参りました。校長が前面に立って対応しているという学校もございました。
ただやはり、中には子ども同士のトラブルということで判断して済ませてしまう
ことで、後になって問題が大きくなってしまうというケース、そういうケースも
ありますので、やはり、周知していく必要があるということ。それから、いじめ
を理由とした欠席があればすぐに教育委員会の担当へ報告するということになっ
ていますが、何日間か欠席してから連絡してくるという学校もありますので、そ
れをさらに徹底して早期対応していきたいと考えております。

あとは、一番ちょっと今心配なのがこの進学・進級に際しまして、しっかり学校
の中、それから小学校と中学校の間で引き継ぎがなされていないというケースが
見られます。確実に引き継ぐとともに、引き継ぎの仕方についても工夫を求めて
いく必要があると考えておまして、年度末に差しかかりますので、各校にその
引き継ぎ等についての通知をしたいと考えております。以上です。

（木幡市長）

○それではいじめの件につきましていかがでしょうか。

さっきの不登校については、結構我々中期的なというか複数年の流れが頭に入っ
ているんですけど、いじめに関してはちょっとよくわからないというか明確にそ
このところは入っていないで、この前もそうなんだけど、グラフともう1つの表で、
2つ同じこと書いてあるわけですよ。そういうのをやるんだったら、せめて長期の
スパンのデータを一部入れてもらった方が、単に去年の比較だけじゃなくて。大
事なのやっぱりその長期的なことだと思いますのでそういうのも、特にここはモ
ニタリングの機会ですから、それをぜひ入れていただけるといいかなというふう
に思いますね。

ほかいかがでしょう。

（立花委員）

○この表で2学期が増えているのは、いじめに対して皆さんが敏感になって、細かいことも拾い上げているからだというのが、いいこととして今ちょっとお話をされたかなと思うんですけど。だから3学期を見てもいいとわからないんですけど、それもすごくあると思うんですけど、実際にいじめが増えているっていうことだったら、本当にちょっと放っておけないことになってしまうので、その辺はやっぱり3学期も見てからなのかなとは思いますが、何でもかんでもいじめにしちゃおうっていうふうなものもそれはちょっと困るかなと思うのでその辺はどのようにお考えでしょうか。

（学校教育課長）

○やはり、2学期になって増えているところなんですけど、1学期はやはりスタートということで、その学級づくりですとかそういったことに力を入れていたというところはあります。それでいじめの件数そのものは少なかったというところはあります。2学期になってそういう面も出てきて増えていったところで、校長と教頭には毎年研修をしているんですけど、今日ちょっと教育委員会の中で話をしたときに、子どもたちにはどんな指導をしているんだろうな、やはり学校の中でしっかりこのいじめはいけないことなんだっていうことを、道徳ですとか特別活動とかで、どんな指導しているのかっていうのをやはりしっかり私たちが押さえておかなければいけないのではないかとということで、そこら辺ちょっと学校の方と連携を図りながら、確認をしていきたいと思っております。やっぱりいじめは絶対に許されないことなんだっていうことをやはり、子どもたち自身が、そういう気持ちにならなければいじめは減らないと思いますので、そういうところについてもちょっと今後力を入れていきたいと思っております。

（教育長）

○今の件に関してなんですけど、やはりいじめは加害者と被害者だけではなくて、傍観者、この存在もすごく大きいと思います。ですから、道徳を要とした指導はもちろんなんですけど、普段の授業の中で子どもが学びとるといって、子どもたちが協働的に学んでいく中で、お互いの良さを認め合ったり、思いやりの心で接したり、そしてみんなで力を合わせて課題を解決した達成感を味わわせたりと、そう

いう日頃の授業の改善というのがやはり大きいと思ってます。そこも力を入れてやっていきたいと思っています。

（市長）

○ありがとうございました。さっき小中の引き継ぎの話がありましたね。結局子どもたち一人一人に応じた記録というのもあるでしょうし、或いは、いじめの観点からの要配慮者リストみたいのも当然、やっぱり作らなきゃいけないんだろうと思うんですよね。そういう、個々の経過を追ったものと、あとその時点時点での要配慮者の把握というか、そういったものをうまく漏れなくできるように、引き継ぎの仕方というか或いは記録の仕方ですよね。そこを詰めていただきたいなというふうに思います。

（渡辺委員）

○この資料の中で、加害者なんかはその気がなかった言動や悪ふざけから発生するものなども適切に認知されていたと素晴らしいと思います。やっぱりここが大事で、この考え方1つで解決するわけではないですけど、やっぱりこう一方的で、その立場とか行為、或いは行われる被害が固定化しているからこそ、いじめになるという面もあると思うんですよね。だから、その行為者側がどうかというのをあんまり重視するばかりでなくて、被害者の側の受けとめがどうかというのは、そこで重要になってくると思うので、できるだけ、かといって教育過程、教育の経過の中で、人間同士であるがゆえにぶつかることはもちろんあり得るわけで、ぶつからないようにしろということではない。それはもう皆さん理解されていることだと思うんですけど。それが一方的な関係にならないようにということだと思うので、そのあたりのノウハウをまた蓄積できるといいかなと。

（木幡市長）

○いじめに関しては、なかなか把握しづらい面がね、この数字の上からもありますけども、やっぱりしっかり分析しながら、より良い方向に改善をしていきたいと思っています。

議題（5）市長部局と教育委員会で連携している事業について

（市長）

○続いて5番目、市長部局と教育委員会での連携事業、一括で説明してもらおうかと

思ったんですけどそれぞれ説明者が違うみたいですから1つ1ついきたいと思うんですが、まず1番目非認知能力育成実証プロジェクトをお願いします。

（学校教育課長）

○それでは非認知能力実証プロジェクトでございます。現在、非認知能力が注目されております。これはIQですとか、学力といったテストなどで評価できる能力ではなくて、物事に対する考え方ですとか取り組み姿勢、行動、日常生活・社会活動において、重要な影響を及ぼす能力、具体的には向上力ですとか忍耐力ですとか、協調性、そういったもの、我慢する、諦めない、粘り強く目標に向かって頑張る。最後までやり遂げるといったもので、こういった能力を見つけていくことが、その後の人間形成に大きく関わってくるということが言われています。この本プロジェクトは、合同会社BIPSコーチングと協定を締結しまして、福島県出身であります代表のボーク重子様と具体的に連携協力し、実践と理論に基づく家庭教育を実践することにより、福島市の子どもたちのよい未来のために、非認知能力、生きる力を育むことを目的とし、市内の認定こども園と小学校をモデル校としまして、保護者に対する講話ですとか、あとは非認知能力を高める学校としての働きかけの実践、そのようなことを行って参ります。連携協定の締結日、予定は2月21日となっております。

（市長）

○これも補足するとですね、ボーク重子さん。川俣の出身なんですね。それで、ご自身が非認知能力を高めるような教育の仕方を子どもにして、お子さんは全米1優秀な高校生というのになつていることもあります。今この関係で会社を形成して、日本で活動しているんですけど、会社自体は今福島市に本社を持たれていまずのでその点では我々、よくボークさんの方と連携して、現実にそういった自分たちで考えさせる教育というのは、例のスーパティーチャーの授業で、我々非常に効果があるというのも確かめられたわけですね。それを今度は家庭教育でもやれば、両方合わせて子どもたちの生きる力というかね、そういったものが非常に上がるんじゃないかと。ただ中身を見ていると決して教育といった堅苦しく持ち込むんじゃなくて、普段やっぱり愛情を持って接するというのが一番のポイントになるんだろうと思うんですけど、そういったものを今後保育所・幼稚園を持つ市長部局と学校の教育委員会と連携してやっていきたいなというものであります。

続いて、スクール・サポート企業登録制度、教育総務課長お願いします。

（教育総務課長）

○お手元にあります登録状況の資料をご覧ください。昨日時点で62社からの登録がありました。市内企業のみならず県外、市外からの登録もあります。次に支援内容では、職場体験に30社、施設見学に30社、出前授業に50社、部活動支援に17社と、数多くの支援、応援の提案があります。登録の募集につきましては、3月11日までを第一次募集期間としておりますが、その後も随時募集をして参ります。すでに登録企業等が60社を超えていることから、当初の計画を前倒しまして、この企業等からの登録情報を小中学校に提供しまして、新年度からの職場体験や出前講座などへの積極的な活用を図って参りたいと思っております。

（木幡市長）

○ご質問などありましたら。ちなみにこれまで、教育委員会と関わりのあったところも当然登録していただくわけだけど、全然なかった企業というのも結構ありますか。

（教育総務課長）

○市内でも関わりがなかったところはあると思いますし、ないところもあります。あと市外のところは当然ないところであります。

（木幡市長）

○あともう一つ、複数の支援内容が1社っていうのはちょっと逆にいうと少ないんじゃないかと思うんで、もしかすると皆さん1つしかできないじゃないかと思っているケースがあるかもしれませんので、無理強いはしなくていいんですけど、幾らでもできますからというのは、お伝えしたほうが良いような気がしますね。本当にこの後のマッチングが楽しみで4月から現実化することを期待したいと思います。

続いて学校体育館へのエアコン設置、教育施設管理課長お願いします。

（教育施設管理課長）

○学校体育館へのエアコンの設置でありますけれども、近年の気候変動、温暖化の進展に伴いまして、熱中症警戒アラートの発出件数も年々増加傾向となっている

ところであります。このような状況を踏まえまして、子どもたちの健康の確保とともに避難所機能の強化という観点から、エアコンの設置が必要なものと考えているところであります。整備には多額の財源が必要となるなどの課題もございますので、より効果的なものとなるよう導入機器や手法について検討し導入を進めて参りたいと考えているところでございます。説明は以上になります。

（木幡市長）

○ちょっとこれは当初予算にも絡むものですから、今日の段階ではここまでということですが、リニューアルもリフレッシュの方もいろいろやらなきゃいけないんですけど。何とか財源上折り合いをつけて、これに関しても、何年ぐらいでやるんだっけ。

（教育施設管理課長）

○現在のところは4年ぐらいでということ考えております。

（木幡市長）

○という形でできるだけ、ちょっと苦しいんですけど、早くやっていきたいというふうに思っています。よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。続いてこどもベースの設置についてこども政策課長お願いします。

（こども政策課長）

○冒頭市長の挨拶にもあった通りでございますが、子どもたちが安全に遊べる場所、安心して過ごせる場所が少なくなっている現状から、小学校の普通教室以外の教室や体育館、校庭などを活用しまして、児童が放課後の時間を伸び伸びと過ごせる居場所づくり、こどもベース構想を進めていきたいと考えております。こどもベースでは児童の遊び場の確保の他、異年齢児の交流や各種体験事業などの推進などを図りながら、子どもたちの伸びやかな成長性、支援していきたいと考えております。実施に当たっての課題であります、地域のボランティアなどの協力をえながらですね、子どもたちが気軽に過ごすことのできる身近な居場所として学校が有効に活用されるよう、今後検討していきたいと考えております。

（木幡市長）

○新年度で新たに学校の中で学童クラブを運営すると。それがあ意味じゃ今後の

今までもやってきているところもあるけど、新しいこどもベースの姿としてはここが最初になるかなというような。どこでしたっけ。

（こども政策課長）

○三小です。

（木幡市長）

○もう最初は場所の確保に苦労していたんですけど、教育委員会に協力いただいてそちらの方で学童を設置すると。県内では結構学童の待機があるみたいですけど、福島市の場合ちょっとなかなかゼロにはならないんですけど、ここ2年間3人だったっけ。今年こそは何とか、ゼロに持っていきたいなというふうに思っております。よろしいでしょうか。

続いて市民センターに関して中央学習センター館長お願いします。

（中央学習センター館長）

○複合棟1階中二階、2階3階は中央学習センター、市民会館、敬老センターの機能を複合化した公の施設として市民センターの名称で3月1日より貸館を開始いたします。市民センターは市長部局所管の施設でございますが、施設内に中央学習センターの事務室を設け、貸館を始めとした管理運営について教育委員会が補助執行をいたします。使用にあたっては予約申請が必要となりますが、予約システムへの登録という形になります。2月17日現在、260団体が登録をしております。3月の申請仕様については475件の予約があり、オンラインによる申請が410件、率で言いますと86.3%。窓口による申請が65件、13.7%となっております。部屋の稼働率ですが1階から3階まで全体で44.4%となっております。なお、今月26日に複合棟のオープニングセレモニーが開催されるということでございます。また、市民センターのオープンに合わせ中央学習センターの主催事業として開館初日の3月1日土曜日9時より、大ホールで小中学校4校によるふれあいコンサート。翌週3月8日土曜日の夜間にこれも新しくできました市民広場を会場とした市民天体観望会を開催する予定となっております。

（木幡市長）

○はい、この件に関していかがでしょうか。

（渡辺委員）

○この稼働率3月のデータをいただいているんですが、時間帯とか或いは曜日によって何か傾向はございますかね。

（中央学習センター館長）

○この全体で44.4%という稼働率ですが、1日のうちで使っている時間帯があれば、使ったということでカウントしている比率ということになります。あと詳しく調査をすればわかりますが、日中の時間帯、それも午前中・午後、こちらの方がどういう割合なのかということは、あとまた調べてみたいと思いますが、現在の手元では資料はございません。なお、3階のみで申し上げますと、28.4%。1階・中2階・2階だけの部分で見ますと、64.3%の稼働率ということになっております。3階部分につきましては、平日の日中、市役所の開庁時間内は市役所の会議室スペースとして使っておりますので、夜間のみ開放、或いは土日も含めてですけれども、開放という形になって使用しておりますので、どうしても率としては低くなってくるのかなというふうに思っております。

（木幡市長）

○1つは実はいろいろな見直しをするときに、かなり初期の段階でオンラインの導入を打ち出したところ、市民の皆さんから随分と反発がありました。ただその点では、それを導入すると同時に一定の調整を加えた結果、リアル受付が多いかなと思ったら、いや、もうびっくりするぐらい実はオンラインが高くて、なんかやっぱりみんなやればやるんじゃないという感じをしています。それから、稼働率の議論だけど、これちょっと逆じゃない。もし書くんだったら1階中2階2階はまさに市民センター本体で、3階も市民センターであくまで補充機能みたいなものなんだよね。だから、まずは本体をちゃんと先に持ってきた上で、ある意味、この3階部分は普通だったらデッドスペースになっているというか、普通は貸さないものがこれだけ実は使われてるってこと。市民利用からするとすごく増えたことになるんだろうと思って。だから、本来だと土日は使うとか夜間使えない人たちがこちらでも使えることになって、あぶれた部分がある意味でやっているからちょっと拡散しちゃっている面があるかと思うんですね。

議題（6）いじめ重大事態等への対応の現状について（非公開）

※福島市総合教育会議設置要綱第6条の規定により非公開とした部分について、

同要綱第7条ただし書きの規定に基づき、議事録を作成しています。

- いじめ重大事態の個別案件の報告
- 個別事案の状況と対応についての意見

17時30分 閉 会